The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「～まで」の意味・機能 ：〈格〉と〈とりたて〉の連続性
Author(s)	難波, 真奈美
Citation	阪大日本語研究. 2004, 16, p. 115-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』16（2004）

「～まで」の意味・機能
―〈格〉と〈とりたて〉の連続性―

Meanings and functions of "-Made"
-Continuity between <case> and <paradigmatic focus>-

難波真奈美
NAMBA Manami

キーワード：格、とりたて、話し手・書き手、コンテクスト、評価、限界、極端

【要旨】

「～まで」は、〈格〉としての機能も〈とりたて〉としての機能も果たす形式である。両者に繋がりがあることは従来の研究でも言われてきたが、その連続性をめぐる分析は十分ではない。そこで本稿では〈格〉の「～まで」形式が〈限界〉を表すことと〈とりたて〉の「～まで」形式が〈極端〉を表すことに注目し、〈コンテクスト〉に現れる〈話し手〉の〈評価〉が二つのカテゴリーを結びつけていることを示した。

1．はじめに

従来「～まで」については、古くから格助詞的用法と副助詞的用法を連続的に持つ形式として、記述がなされてきた（此島1978他）。その後〈格〉と〈とりたて〉の研究の発展に伴い、「～まで」形式も格助辞ととりたて助辞に分けて考察が進められた。

格助辞を連語単位で取り出した言語学研究会編（1983）では、名詞と動詞のむすびつき方に応じて「まで格」が以下のように整理されている。

荒（1977）の分類

- 1．状況的なむすびつき
  - i 空間的なむすびつき
    - ・終点のむすびつき
    - ・移動の範囲のむすびつき
    - ・いきさきのむすびつき
    - ・状態の範囲のむすびつき
    - ・状態変化の範囲のむすびつき
    - ・知覚活動の範囲のむすびつき
  - ii 時間的なむすびつき

2．規定的なむすびつき　・様態規定のむすびつき
　　・量規定のむすびつき
3．対象的なむすびつき

一方、とりたて助辞の「まで」は、沼田（2000）が詳しい。沼田（2000）ではとりたて詞の統語論的特徴として、次の四つがあるとしている。

a.分布の自由性（文頭や文末には現れないが、文中での分布は相当自由。）
b.任意性（とりたて詞はそれがなくても文が成立する。）
c.連体文内性(とりたて詞はすべて連体修飾文中の要素となりうる。従って係助詞ではない。)
d.非名詞性（とりたて詞は名詞性を持たない。）

また、「とりたて詞の意味は、次の4種8個の基本的特徴とその組み合わせで体系的に記述できる」としている。「も」を例に取り、「太郎も学校に来る」という文を用いての説明が下の通りである。

a 自者と他者：自者＝とりたて詞がとりたてる文中の要素。
　　他者＝それに端的に対比される自者以外の要素。
b 主張と含み：主張＝とりたて詞が明示する意味（「太郎が学校に来る」という明示的主張）。
　　含み＝とりたて詞が暗示する意味（「太郎以外が学校に来る」という暗示的主張）。
c 肯定と否定：自者「太郎」について「太郎が学校に来る」という文が表す事柄は真であるとして「肯定」される。これを自者－肯定と呼ぶ。
　　一方、含みでも他者「太郎以外」について「太郎以外が学校に来る」という文が表す事柄は真であるとして「肯定」される。これを他者－肯定と呼ぶ。
d 断定と想定：断定＝ある事柄に対して、話し手がそれを真または偽として断定するもの。
　　想定＝真偽を断定せず、話し手や聞き手の自者・他者に対する想定を表すもの。

「まで」には格助詞、順序助詞、助動詞に近いもの、とりたて詞があると認めている。とりたて詞の「まで」については、主張が断定・自者－肯定で含みが断定・他者－肯定か

つ想定・自者－否定であるとし、二次特徴として「自者と他者の間に自者を最端とする序列がある」となっている。

以上のように〈格〉の分析や〈とりたて〉の意味論的な分析は進められてきたものの、〈コンテクスト〉を視野に入れた研究は見られず、「～まで」における〈格〉と〈とりたて〉の連続性も何故そのような現象が起きるのか、十分に考察されてはいないようである。

そこで本稿では、実際に集めたデータをもとに「～まで」の意味・機能を探り、格助辞ととりたて助辞の「まで」の関係を明らかにすることを目的とする。資料には現代小説（4冊）・論述文（4冊）・エッセイ（2冊）と、新聞データとして「CD－毎日新聞2000版」を一部使用している[1)]。

2．〈格〉と〈とりたて〉の「～まで」形式

2．1．まで格の名詞と動詞とのくみあわせ

「まで格」の名詞と動詞とがむすびついて出来る連語は、前章でも述べたようにむすびつき方の違いから大きく3つに分けられ、さらに名詞と動詞のタイプに応じて細かく分かれる。

この〈格〉の「～まで」形式についてはほぼ言語学研究会編（1983）における分析に従うが、資料の年代差なども考慮し、多少組み替えている。

以下で、実際の例を交えながら、典型的で量の多いものから順にその分類を示す。

Ⅰ.状況的なむすびつき[2)]

「状況的なむすびつき」は、かざり名詞がかざられ動詞の表す動作・状態の、周辺的状況を表すむすびつきで、「まで格」の名詞は動詞にとって動作の成立に必須なものではなく、むすびつきはゆるやかである。ⅰ空間的なむすびつきと、ⅱ時間的なむすびつきがある。

ⅰ.空間的なむすびつき

①ゆくさきのむすびつき

：《空間的な意味を持つまで格の名詞》＋《移動動詞》

《移動動作の状態を表す動詞》

(1)　十七時発青森行きの二十二便が最終便となるはずだったが、私は今朝の四便で青森まで行き、その折り返しの三便でまた函館へ戻ってくる予定を立てていた。（海峡）

(2)　一番奥まで進み、扉の脇に据え付けてあるポストの上を探ると、ちりんと音を

たてて、小さな鈴のついた鍵が手に触れた。(花嫁)

このむすびつきはかざり名詞が示すものが動作の「ゆくさき」であり、ある意味で「動作の直接の対象」とも考えられる。参考に『日本語文法・連語論(資料編)』を見ると、「に格」の「ゆくさきのむすびつき」は〈対象的なむすびつき〉に分類されている。

しかし「まで格」の場合、かざり名詞は「に格」ほどはっきり直接動作の対象であるゆくさきを示してはいない。例えば「一番奥まで進む」と「一番奥に進む」なら、「に格」のほうは「進む」という動作の対象が「一番奥」と明示されている形だが、「まで格」だと「一番奥」は動作過程の終了限界点で、それまでの「進んでいる過程」のようなものがクローズアップされてくる。「一番奥に歩く」とは言えないが、「一番奥まで歩く」といえるのは、後者は状況的な性質が強いからである。

以上のことから「まで格」のゆくさきのむすびつきは〈状況的〉でありながら〈対象的〉なニュアンスも含まれており、〈空間=対象的なむすびつき〉と言えるだろう。

②状態の存在する範囲

:《空間的な意味を持つまで格の名詞》+《状態を表す動詞》

かざられ動詞が「状態」を示すようになると、空間性を持つまで格の名詞は、かざられ動詞で示される状態の存在する範囲の〈限界〉を表すようになる。この時、かざられになるのは、存在動詞(ある、いる)や「〜している」の形をとった動詞である。また動詞「続く」は、「続く」でも「続いている」の形でもこのむすびつきを作る。

(3) 扉の先は、十度ほどの傾斜を持った穴が、一直線に発電所の最下層まで通じている。(ホワイト)

(4) 足洗沢頭までは、ゆるやかな登りが続く。(ホワイト)

ii.時間的なむすびつき

:《時間を示すまで格の名詞》+《主体動作動詞》

かざり名詞が時間を示すものだと〈時間的なむすびつき〉が出来、動詞は動作や状態の「継続」を表す。かざりになる名詞は、《時間名詞》や《動作性の名詞》[3]、その他時間的な側面を持つ名詞であり、かざられになる動詞は《主体動作動詞》[4]である。この「まで格」の〈時間的なむすびつき〉は後に述べる「までに格」の〈時間的なむすびつき〉と対応しており、「まで格」の名詞はかざられ動詞の示す動作の終了する〈限界点〉を示す。

(5) 花井が転校せず卒業まで学校に残ったなら、私は人間としての尊厳を維持でき

たかどうか疑わしい。(海峡)

(6)　自分という人間は、一体、何をして今まで生きてきたのだろうか。(花嫁)

II.規定的なむすびつき[5)]

「規定的なむすびつき」では、かざり名詞は、かざられ動詞が表す動作・状態の持つ側面を規定する。状況的なむすびつきよりは名詞と動詞とのむすびつきが強いが、かざり名詞は動作の成立そのものには影響しない。i 動作の様態、ii 量規定のむすびつき、iii知覚・思考活動の範囲、の三つに分けられる。

i.動作の様態

：まで格の名詞＋《くっつけ動詞》

被る、埋まる、浸かる、沈むなどの《くっつけ動詞》がまで格の名詞と結びつくと、動作の様態を規定するむすびつきが出来る。かざりとなる名詞は、《体の一部分を示すもの》が多い。

(7)　千尋は悲鳴を上げて頭まで布団を被ってしまった。(花嫁)

ii.量規定のむすびつき

：まで格の名詞＋届く・垂らす・《存在動詞》

届く、垂らすなどの動詞や《存在動詞》「ある」がまで格の名詞とくみあわさると、かざり名詞はかざられ動詞が示す状態の量を規定する。

(8)　腰まで届く長い黒髪の、美しい少女。(作例)

(9)　髪は今よりも短くて肩のあたりまでしかないが、陽の光に輝いて、パールの髪留めが似合っている。[6)]

iii.知覚・思考活動の範囲

：まで格の名詞＋《知覚・思考活動を表す動詞》

見える、聞こえるのような《知覚活動を示す動詞》や、考える、分かるのような《思考活動を示す動詞》がまで格の名詞とむすびつくと、知覚・思考活動の範囲が表される。

(10)　だが、私自身に細部までは分からなくても、専門家の話を理解できるならば、全体像をつくることは可能なはずだ。

III.対象的なむすびつき[7)]

：《人や組織をあらわすまで格の名詞》＋《言語活動動詞》

「対象的なむすびつき」においては、かざり名詞が「かざられ動詞の示す動作の向かっていく先＝対象」になっていて、動作の直接的な対象を表している。そのた

め名詞と動詞との関係が密で、切り離すことが出来ない。「まで格」では下の形しか見られず、用例もごくわずかである。

(11) 孤児となった状況や写真をご覧になって、あなたの肉親に似ている孤児がいる場合、また、心当たりのある人や手がかりのある人は厚生省まで連絡、相談して下さい。

以上のように、「まで格」では、「状況的なむすびつき」が中心となっており、「対象的なむすびつき」はほとんどないことが分かる。言語学研究会編（1983）で中心的に論じられている「を格」や「に格」の場合では[8]、名詞と動詞とのむすびつきが必須である〈対象的なむすびつき〉が主流だから、「まで格」は、日本語における最も典型的な〈格〉からは少し外れた存在であるようだ。

「状況的なむすびつき」では、名詞は動詞にとって必須成分ではないから、他の機能へと転化しやすく、〈格〉と〈とりたて〉の「～まで」形式の間に、中間的なものが見られると考えられる。

2．2．〈とりたて〉の「～まで」

〈とりたて〉の「～まで」形式では、「～まで」がとりあげる物事は現実の他のものごとと比較して〈意外〉と捉えられている。このことは先行研究でもしきりに言われており、沼田（2000）では下のような例を使って自者と他者の間に序列があり、その最も極端なものとして「～まで」がとりたてる自者があると説明している。

〔沼田（2000）の例〕（あの病院は、）病気と無関係の検査まで行う。

・当たり前の医療行為は当然行うが、その上に、例えば必要以上の投薬や必ずしも必要でない検査を行うといった行き過ぎの医療行為を重ね、そのあげく、最終的には病気と無関係の検査を行うという不正行為に至る。

確かに、様々な検査と自者「病気と無関係の検査」の間に序列が存在し、だから自者が〈意外性〉を帯びるとは言えるかもしれない。しかし何故それが「意外である」と分かるのか。

この問題を考えるためには、とりたて助辞「まで」が含まれる一文だけではなく、〈コンテクスト〉を見て〈評価〉について考察する必要がある。

あるものが「極端なものであり、意外である」と〈評価〉が行われる際には、必ずその〈評価〉を行う主体が存在するはずである。そしてその評価主体となるのは、〈話し手（小説やエッセイの会話文における、発話行為の主体）〉あるいは〈書き手（小説の地の文・論説文・エッセイ・新聞における、著者）〉である。

(12)　微笑んでいた口許の両端から次第に緩みが奪われ、微かな望みまで硬直していくのが伝わってきた。(海峡)

(13)　［アルバイトの学生たちが、十何人も一度に室内で煙草を吸うのに辟易して］目黒さんに、「煙草をなんとかしてほしいんですけど」というと、目黒さんは、「アルバイト代も払っていないのに、彼らにそんなことまでいえないよ」という。(別人)

(14)　中には、「今後絶対沢野さんのいうことはききたくない」と断言する青年までいて、困ってしまった。(別人)

(12)の例では程度を表す形容詞（二重線部）が、〈書き手〉の〈評価〉を明示している。(13)では指示詞「そんな」を使うことで、〈話し手〉がその名詞を「極端なもの」として考えていることが明らかになるようである。(14)のように感情を表す動詞（困る、心配するなど）で直接〈話し手〉の気持が表われていたり、前後の文脈に〈話し手〉の感情・評価が見られるものもある。

このように〈とりたて〉の「～まで」形式には〈話し手〉〈書き手〉の〈評価〉が大きく関わっており、またそれゆえに共起しやすい形式も見られる。以下に、それらを示す。

Ⅰ.前の形式に特徴があるタイプ

前に同類の物事が並んでいるもの(15)、一部の陳述副詞や接続詞をともなうもの(16)、「A だけでなく B まで」「A どころか B まで」「A したうえに B まで」といった形で比較する物事が示されたもの(17)、がある。

(15)　クラスメートたちは面白半分に私の罪を捏造しはじめた。態度が生意気だとか、髪が長いとか、生活を乱している、給食をよく残す、掃除が雑過ぎる、身だしなみが悪い、毎日着ている服が同じで汚いとか、目が反抗的過ぎるなど、中には顔が嫌いという意見まであり、容赦なく批判されたが、私を弁護するものは一人もいなかった。(海峡)

(16)　彼はまだ昏々と眠り続けていてね。大白ダムから奥遠和まで戻って、しかも、あなたまで助けたのだから無理はない。(ホワイト)

(17)　ロシア政府としては、極東の水産資源から上がる外貨と税収は、決して侮ることのできない、貴重な収入源だった。最近では国境警備隊だけではなく、海軍まで動員しての海域警備を行っていた。(ホワイト)

Ⅱ.述語の形式に特徴があるタイプ

「～してしまう」「～しなければならない」「～しておきながら」など否定的なニュアンスを伴うもの(18)(19)(20)、疑問・反語形式のもの(21)、「～してもらう」「～してくれ

る」など肯定的なニュアンスを伴うもの(22)、がある。

(18) ところが話しているうちにだんだんそのときの怒りがよみがえって興奮し、最後は社長に対してその件について厳しく詰問までしてしまったのである。(別人)

(19) 「この子、私のことまで忘れてしまっているんだわ」(花嫁)［記憶喪失の千尋の、「母」だという女性の発言］

(20) 事故に遭ったことを話せば、自然に原田との結婚話のことから杉崎とのドライブのこと、事故のことまでも話さなければならなくなるだろう。(花嫁)

(21) 「だったら調べろ。やつは何を企んでる。どうしてダムの中の電力までストップさせた！」(ホワイト)

(22) 今から思えば人妻にトイレの掃除までしてもらって、私は甘え放題甘えてしまった。(別人)

普通、〈話し手〉や〈書き手〉の〈評価〉は、上のように〈コンテクスト〉になんらかの形を伴って現れるものだが、それがまったく見られない場合、〈評価〉は「社会常識」に依存する。

(23) ［小さな事務所で、電話番をしていると］四谷警察署の刑事さんまで来たこともあった。(別人)

(24) 下の前歯三本しかないあの口で、漬物でも草加せんべいでもなんでも食べてしまうのだから、私はついおばあさんの食事する様子に見とれてしまいがちなのだが、そうやっておばあさんのぽっかり開いた洞窟のような口に魂まで吸いこまれそうになっていると必ず、おばあさんはじろり、とこちらを見て言うのだ。(ポプラ)

(25) 冬の剣岳で遭難の一歩手前まで行った時も、そんな山の男たちの助けがなければ、今の自分がここにいたかどうか分からない。(ホワイト)

〈書き手〉が社会常識と照らし合わせて「～まで」がくっついた物事を「普通ではない極端なもの」と考えていると、〈聞き手〉にもその物事だけで〈意外性〉が伝わると考えられるためか、〈コンテクスト〉に特徴がないことがあるのだ。

例えば(23)で、〈書き手〉は「普通小さな一事務所を、刑事が尋ねてくるようなことはない」と考えていて、〈意外性〉が生まれると考えられる。

まとめると、とりたて助辞の「～まで」は、

・前後の形式に〈話し手〉の〈評価〉を表す形式を伴う

・社会常識に照らして〈書き手〉が「意外である」と考える物事をとりたてる

のいずれかの形で、〈極端性＝意外性〉を表している、と言える。

2．3．〈格〉と〈とりたて〉の中間

上述のように格助辞ととりたて助辞の「まで」を、

〈格〉：時間的・空間的・量的に、物事を客観的に〈限界〉づける。

〈とりたて〉：〈話し手〉〈書き手〉が物事を〈評価〉して、現実の他の物事と比較しての〈極端性〉を表す。

と整理した上で、次に〈格〉とも〈とりたて〉ともとれる中間的な「〜まで」形式について考える。

こういった〈格〉と〈とりたて〉の連続性については、寺村（1991）において、「取り立て助詞的な使い方と、「単なる限界点」を示す格助詞的な使い方もまた連続したものと考えるのが自然である」と述べられている。「仙台まで恋人を追って行った。」のような例で、その仙台が心理的に非常に遠いところと感じられる場合、「そんなに遠いところまで」と情熱の強さが強調される効果をもつ、というのである。

この論はたしかに「〜まで」形式の持つ〈限界〉から〈極端〉への連続性を指摘してはいるが、具体的な事実に基づいた説明は完全なものとは言えないだろう。本稿では、実例の〈コンテクスト〉を踏まえてこの〈格〉と〈とりたて〉の連続性の記述を試みる。

(26)　「ちょっと。お嬢さんたちをこんな夜遅くまで働かせていいんですか」と彼は怒った口調でいった。（別人）

(27)　競技はまず二百メートルスプーンリレーからスタートした。強い風が吹いているのでスプーンの上のピンポン玉はすぐ落ちてしまい、落ちるととんでもないところまでころがっていった。（フグ）

(28)　シベリアというところはさすがにすさまじい世界で、冬はマイナス六十度にまで下り、夏は同じ所がプラス三十度まで暑くなった。（フグ）

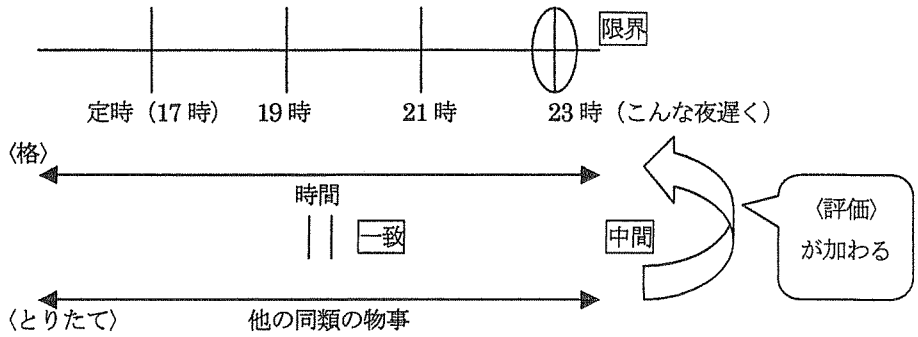
まず、「まで」を格助辞として見ると、(26)は時間、(27)は空間、(28)は程度を〈限界〉づけているように思える。一方でこれらの例には、とりたて助辞の「まで」に見られた〈話し手〉の〈評価〉を表す形式も含まれている。

「まで格」で示されるのはなんらかの〈限界〉だから、その〈限界〉を〈話し手〉が〈極端〉であると考えると、とりたて助辞に近くなるのは寺村（1991）にもある通りである。

(26)を例にとって見てみよう。この例では、「こんな夜遅く」という時間（実際には23時過ぎ）が、「働く」という動作の継続する時間的限界を表している点で、「〜まで」形式が格関係を表している。一方で、その「こんな夜遅く」という時間は、ふつう人が働くのをや

めて帰宅する時間（例えば、定時の17時など）と比較して極端に遅い時間とも考えられ、「～まで」形式は〈話し手〉の〈評価〉をともなった〈とりたて〉とも取れる。図にすると下のようになる。[9)]

【図１】〈格〉と〈とりたて〉の関係



図のように、この例では〈格〉の場合に客観的〈限界〉を表すスケールと、〈とりたて〉の場合に現実のほかの同類の物事を表すスケールが、一致していると言える。そのため、〈格〉の表す客観的限界を〈話し手〉が〈極端〉だと捉えた場合〈意外性〉が生まれ、格関係を表しながらとりたて性を帯びた中間的な用法になるのである。

このような現象が起こるのは、ほとんどが「まで格」で状況的なむすびつきを作る名詞と動詞とのくみあわせで、やはり「まで格」の名詞が動詞にとって必須成分でないがゆえに、移行が起こりやすいようだ。ただ、寺村（1991）ではこの現象を「時間・空間」に限っているが、(28)の例のように規定的なむすびつきから〈とりたて〉性を帯びるものも数は少ないが存在している。

以上の事から、「～まで」における〈格〉と〈とりたて〉の関係をまとめると、次のようになる。

〈格〉	：限界（客観的）
	↕ 客観的限界 ＋ 話し手の評価 ＝中間的なもの
〈とりたて〉	：極端＝意外（〈話し手の評価〉）

また、指示詞「ここ」「そこ」が「～まで」形式と結合した場合、中間的に成りやすい。

(29) 密漁者たちはわたくしが砂州の上でぼんやり見ている間に一メートルほどの鮭をたてつづけに三本も四本も上げていた。卵を生みにせっかくここまでやってきたというのになんとも無念なことだろう、と思った。（フグ）

指示詞の場合には「これまで」「それまで」を使った、純粋に時間的なものはない[10)]。し

かし、下の例のように「ここまで」が文脈上時間（を含めた状況）を表すことがある。

(30) 時間の感覚が分からなくなりそうだった。なんと長い道程だったかとも思う。しかし、一瞬のうちにここまで来てしまったような気もした。（花嫁）

また「ここまで」「そこまで」には、極端な程度を表す〈規定的なむすびつき〉から〈とりたて〉に近くなったものと似たものもある。この場合、〈空間的〉なものや〈時間的〉なものより、さらに〈とりたて〉性が強く感じられる。

(31) コンパクトタイプの銀の鏡は、表面に花の模様が描かれているが、半分くらい消えかかっていた。おそらく、相当に使いこんだものなのだろう。もしも本当に、これが千尋自身の持ち物なのだとしたら、そんなところにも愛着を感じるのかもしれないが、見知らぬ人の持ち物としか感じられない物に、ここまで使いこんである形跡を発見すると、なんとなく薄汚れた感じがする。（花嫁）［千尋は記憶喪失］

(32) 「部長！そんな御夜食までお世話いただいて……。いけません、いけません。そこまで御好意に甘えるわけにはまいりません。わたくしお代金をお支払いいたします」（別人）

下の例になるともはや時間なのか程度なのか、全てがまとめて示されていて分からない。

(33) こいつ［＝新鮮イカのシオカラ］をドンブリにのせると当然ながらイカノシオカラドンになる。もうここまできたらそれしかない、という使命感もあって、素早くのせた。（フグ）

以上見てきて分かることは、指示詞に「～まで」がくっついて〈格〉と〈とりたて〉の中間的な用法になる場合、「ここまで」「そこまで」という両形式が〈空間的〉〈時間的〉〈規定的〉全ての場合に用いられる、ということである。

これは指示詞「ここ」や「そこ」が単に空間だけでなく、文脈上様々なものを指すことができるために起こる現象だろうが、この考察を進めるためには〈コンテクスト〉を考慮した指示詞の研究が先に必要だろう。

3．副詞化・連体詞化する形式

「～まで」形式は単独で格助辞やとりたて助辞として機能するだけでなく、他の格助辞やとりたて助辞を伴ったり、また固定化して慣用的に用いられるものもある。

ここではそのうち、〈評価〉に関連するものとして、副詞化・連体詞化する形を取り上げる。このような形をとるものには、「～までに」[11]　「～までの」[12]がある。具体的には、

次のようなものである。

(34) なぜ、この時期に、執ようなまでに日本の政府機関を標的にするのか。

(35) 返ってきた無線の声は、奇妙なまでに落ち着いていた。(ホワイト)

(36) だが描き込みを減らして筋肉をリアルに描く方向に傾きがちな最近の格闘マンガ界にあっては、このくどいまでの描き込みが、かえって強い印象を与えるのだ

形容詞の連体形に「～までに」あるいは「～までの」がくっついた形が、全体で副詞あるいは連体詞的に働いている。この形を作る形容詞はもともと「くどい」のように、〈評価性〉をもつ形容詞のなかでも、否定的な〈評価〉を強く含んでいるように見える。

この形は形容詞だけを用いた時より、〈話し手の評価〉を強く表すようだ。

例えば「執ようなまでに日本の政府機関を標的にする」の例だと、「執ように日本の政府機関を標的にする」よりも〈極端である〉という〈話し手〉の〈評価〉が強く出てくる。「執ように」では客観的な事実として標的にするし方を述べているだけだが、「執拗なまでに」だと〈話し手〉の否定的な〈評価〉が前面化しているのだ。

このことは、「～まで」がとりたて助辞として用いられることとおそらく無関係ではないだろう。〈格〉から〈とりたて〉への移行は、〈格〉の表す客観的限界に〈話し手〉の〈評価〉が加わって〈極端性〉を持ったときに起こった。その〈とりたて〉から他の同類の物事との関係が無くなり、〈話し手の評価〉だけが前面化されたのが、この形なのである。

4．まとめ

以上本稿では、「～まで」形式における〈格〉と〈とりたて〉の連続性を解き明かすため、〈話し手〉〈書き手〉の〈評価〉に注目して議論を進めてきた。もう一度全体をまとめて図にすると、次のようになる。

【図2】「～まで」形式の機能と意味

	〈格〉関係	〈とりたて〉関係	
機能	命題内容を構成	現実の他の物事との関係についての、〈話し手の評価〉を表す	
特徴	状況的(時間・空間的) 規定的(量・程度的)	陳述的側面	(連体詞化、副詞化した場合)
意味	〈限界性〉	〈極端＝意外性〉	〈話し手〉の否定的〈評価〉そのもの

＋［〈話し手〉の〈評価〉］－［同類の物事との関係を表す機能］

このように、文の対象的内容（命題）を構成する〈格〉関係において、その〈格〉関係としての〈客観的限界〉に、同類の物事と比較して〈極端なもの〉だという〈話し手の評価〉が加わると、〈極端＝意外〉を表す〈とりたて〉に近づいていく。〈とりたて〉とは、ほかの同類の物事との関係を話し手の立場から表し分けるものだが、このような他の同類の物事との関係を表す機能が無くなって、〈マイナス評価〉だけが前面化すると、連体詞化・副詞化しつつ固定されていくと言えよう。

前述したように、「まで格」は、対照的なむすびつきではなく状況的なむすびつきを中心的に表す点で、「を格」や「に格」に比べて、周辺的なものであった。このような周辺的な格関係を表す形式だからこそ、「とりたて」関係との連続性が出てくるといえるかもしれない。

今回は「〜まで」形式の場合しか考察できなかったが、今後はほかの形式についても考えていかなければならないであろう。また、〈格〉と〈とりたて〉の中間的な用法では指示詞が重要な機能を果たしているように思われる。これについては〈コンテクスト〉を十分に考慮した考察が必要である。今後に期したい。

【脚注】

1）新聞データ以外は全例を集め、本稿で扱っていない形式（「までの格」など）についても分析は行っている。
新聞データ「CD－毎日新聞2000版」は、大阪大学日本語学研究室で購入し、許諾を得たものを使わせていただいた。

2）かざり名詞が、かざられ動詞の示す動作の「周辺的状況」を示す場合のむすびつき。まで格の名詞は動詞の成立にとって必須のものではない。まで格においてはこの「状況的なむすびつき」が中心になっていることから、〈とりたて〉に移行しやすいと考えられる。

3）この《動作性名詞》に近いものとして、動詞の連体形に「まで」がくっついた形で時間を表す場合もある。
・甲府に着くまで、ぼくは便所の前の通路にしゃがんで文庫本を読んでいた。（フグ）

4）後の《主体変化動詞》《主体動作客体変化動詞》を含め、工藤（1995）の規定に従う。

5）かざり名詞が、かざられ動詞の示す動作の「側面を規定」する場合のむすびつき。「状況的」な場合よりは名詞と動詞とのむすびつき方が強いが、「対象的」な場合ほどではない。

6）例(9)は「ある」に対応する否定形式「ない」になっているが、「肩のあたりまである」という言い方は可能である。

7）かざり名詞が、かざられ動詞の示す動作の「直接の対象」を示す場合のむすびつき。名詞はかざられ動詞の動作が成立するためになくてはならない要素である。

8）その他に「から格」があるが、基本的なカテゴリーの分け方が違っているので除外。

9）ここで＜評価＞を表しているのは、「こんな（夜）遅く」の方ではないか、とも考えられるが、

「23時まで働かせて」とした場合でも＜極端＞だと捉えられることから、やはり「まで」が＜極端性＞を帯びていると考えるべきだろう。「こんな夜遅くに働く」と「こんな夜遅くまで働く」だとほとんど差は感じられないが、「23時に働く」と「23時まで働く」だと、明確に後者のみ＜極端性＞が現れてくる。

10) 「それまで」「これまで」などは、完全に時間を表す固定された表現形式になっていると考えられる。

11) 「～までに」の形には、「夏までに判定が出る」のような時間を表す〈格〉の用法がある。これが「～までに」の中心的な用法だが、固定化したものとして挙げられる形がこの章で取り上げる「副詞化したもの」である。

とりたて助辞の「まで」と格助辞の「に」が結合した場合、「までに」の形になることが考えられる。しかし、実際にはそのような場合ほぼ「～にまで」の形が用いられ、名詞に「までに」がくっついて〈とりたて〉を表すことはほとんどない。例外は次の例に見られるように、「から格」を伴う場合と、前に動詞がくっつく場合である。

・朝練習も、午前7時半から11時までに及ぶ。

・ペルージャグッズは日本で販売されるまでになり、昨年には日本遠征も実現。

なおここで、時間を表す限定的な格助辞として用いられる「～までに」について補足しておくことにする。

「～までに」形式の扱いについては諸説あり、奥津（1966）では、「まで」に格助詞としての用法や強調の用法のほか、順序助詞としての用法があるとしている。そして順序助詞「まで」に、格助詞の「に」がくっついてできたのが「までに」である、と考えている。言語学研究会編（1983）の中の井上（1963）には、「「までに格」の名詞と動詞とのくみあわせ」が章として立っており、「までに」全体が名詞にくっついて格関係を表す、と考えている。

ここではひとまず「～までに」を一つの格助辞として扱うことにして、同じく時間的なむすびつきの、「まで格」の場合と比較してみる。

(a) 私は、十九日までに思い出さなきゃならないんだから。（花嫁）

(b) 場所を移し、十一時すぎまでつき合い、解散となった。（ホワイト）

「までに格」でも「まで格」と同様、かざりになる名詞は時間名詞であるが、かざられになる動詞のタイプと、意味内容が異なる。

「まで格」では《主体動作動詞》がかざられになって「時間的な継続」を表していたが、「までに格」ではかざられは《主体変化動詞》か、《主体動作客体変化動詞》であり、表される意味は「期限」である。

まず、(a)の例の「～までに」を「～まで」に変えてみると、非文になることがわかる。

(a')＊私は、十九日まで思い出さなきゃならないんだから。（花嫁）

これは「思い出す」と言う動作が、「動作継続」を表さないためだろう。「何かを思い出す」という動作はある一点において行なわれるもので、連続してずっと行われているようなものではない。「まで格」では〈時間的なむすびつき〉が、〈限界点〉までの動作や状態の「継続」を表すため、「動作継続」を表す動詞とでないとむすびつくことは出来ないのである。

逆に、(b)の例を「～までに」に入れ替えた場合もやはり非文となる。

(b')＊場所を移し、十一時すぎまでにつき合い、解散となった。

「つき合う」という動作は、必ずある程度の時間的な継続を必要とする。だから「期限」を表す「までに格」とは、むすびつかないのである。

まで格：《主体動作動詞》をかざられとし、「動作の継続」を表す。

までに格：《主体変化動詞》《主体動作客体変化動詞》をかざられとし、「期限」を表す。

これらのことから、「まで格」と「までに格」では時間を表す場合にむすびつく動詞と表す意味がそれぞれ異なっており、このような対応関係が見られることを考えると、「までに」を一つの限定的な格助辞と認めてもよいのではないだろうか。

12)「〜までの」という形には他に、「昨年末までの抗議行動」のように、連体的な格である「までの格」の場合と、「豪州にはそこまでの報酬システムはない」のように、とりたて助辞の「まで」が関わっている場合がある。ただし、後者の場合は少ない。

【参考文献】

伊藤智博（1997）「「まで」の表現機能に関する一考察」『日本語・日本文化』23,大阪外国語大学留学生日本語教育センター

奥津敬一郎(1966)「「マデ」「マデニ」「カラ」―順序助詞を中心として」『拾遺　日本文法論』(1996)ひつじ書房

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

此島正年（1983）『日本文法史概説』桜楓社

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

茂木俊伸（1999）「とりたて詞「まで」「さえ」について―否定との関わりから―」『日本語と日本文学』28,筑波大学国語国文学会

――（2000）「順序助詞句「A から B まで」について」『筑波大学応用言語学研究』7

筑波大学大学院博士過程文芸・言語研究科応用言語学コース

寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味　第III巻』くろしお出版

中西久美子(1995)「モとマデとサエ・スラ―意外性を表すとりたて助詞―」『日本語類義表現の文法（上）単文編』くろしお出版

中野亜美（1997）「「意外性」を表す取りたて助詞「も」「まで」「さえ」の一考察」『さわらび』6,文法研究会

彭広陸（1999）「複合連体格の名詞を《かざり》にする連語」『ことばの科学』9，むぎ書房

沼田善子（1986）「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

――（2000）「とりたて」『日本語の文法2時・否定と取り立て』岩波書店

樋口文彦（2001）「形容詞の評価的な意味」『ことばの科学』10，むぎ書房

堀川智也（1991）「「マデ」と否定のスコープ」『北海道大学言語文化部紀要』20

【用例出典】

〔小説〕

真保裕一（1998）『ホワイトアウト』新潮文庫＜ホワイト＞

辻仁成（2000）『海峡の光』新潮文庫＜海峡＞

乃南アサ（1997）『6月19日の花嫁』新潮文庫＜花嫁＞

湯本香樹実（1998）『ポプラの秋』新潮文庫＜ポプラ＞

〔論説文〕

小宮山宏（1999）『地球持続の技術』岩波新書＜地球＞

椎名慎太郎（1994）『遺跡保存を考える』岩波新書＜遺跡＞

清家篤（1998）『生涯現役社会の条件』中公新書＜生涯＞

山崎幹夫（1991）『薬の話』中公新書＜薬＞

〔エッセイ〕

椎名誠（1989）『フグと低気圧』講談社文庫＜フグ＞

群ようこ（1988）『別人「群ようこ」のできるまで』文春文庫＜別人＞

「CD－毎日新聞2000版」＊用例出典の記載のないものは、全て新聞データのもの。

（卒業生）

（2003年９月１日　受付）

（2003年９月25日掲載決定）